

- 1 孕み猫耳立て遠き雨の消えがた
2 濡れ髪のまま長く居てのどけしや
3 緋の衣蝸牛みな伏し拝む
4 春霖や庇に瞑る魂幾日
5 片言に菜の花言うて指さす頃か
6 花灯消せば一生と消えるかな
7 田螺鳴く万(よろず)の道に迷いけり
8 母子草とは美しき名悲しき名
9 春風に重なり合うてはらからよ
10 花冷や満ち引き睦む海しばし
11 暖かし御開きという終わり方
12 滴りて一球ずつに水温む
13 新しき鳥容れてまた囀れる
14 歳月に蒼はいのちの彼岸かな
15 春月の湖心に向かう処女等か
16 魚昆布白紙に祀り春の暮
17 花過ぎの日照雨半島はみ出して
18 春雨や刻見るための灯を点し
19 春宵の触れば応らう黄金かな
20 青炎の睡郷蜻蛉生れけり
21 桜餅指の力の餡零す
22 古ル道に蝶々の妙(たえ)誰が為や
23 父母の息で繋がる風車
24 遠く畑返す人月色に風ぎ
25 成り捨ての犬死のみな朧なり
- 26 春愁四方定型に傳かれ
27 手放せばしだれてゆくや花も身も
28 微睡(まどろ)みの頬熱帯びる梅雨曇
29 うすずみや短き喜雨に潮映えて
30 遠雷に今朝から芋の煮くずれる
31 浜木綿や草履に常の潮じめり
32 蕾付けし木々のしなり商人(あきんど)は
33 木の国の雨の重さや花蜜柑
34 桜餅苦手な人と干支も同じで
35 蝶々を追いかけてゆく叫(おら)びなり
36 もういないあの子にも風船貰う
37 暮遅し星の火種の臭うなり
38 西方や芍薬枯らす内庇
39 老人の煙を立てる暮春かな
40 初蟬や髪束ねられる死後に
41 水中花水の棺の欲しいまま
42 巢燕の半眼に総立ちの故郷や
43 ライチ摘む腕(かいな)増えてゆきにけり
44 巢立ちしと知りて少し賑わう吾か
45 鼻歌も飴玉も麦畑に入り消えし
46 五月雨にみな煙となるあわれかな
47 塩振りし舟の出でゆく母の日や
48 トビウオ干し物となりたがり夕焼け
49 水無月や死んで名前を覚えられ
50 夏の日の雑巾重なりしまま消える

- 51 花茄子美しかりし母に小雨
 52 まくなぎをぬけてまくなぎ明かりかな
 53 十葉や風の中なる鼻塵紙
 54 血が出たと網戸の外で子がうるさい
 55 蛇苺どれも真つ赤に貧しき家
 56 父の日やいつも肌着に任侠は
 57 藤の花定型に散りやすきかな
 58 降るよりも止んで蛍を起こす雨
 59 浜木綿や離島を誘う西日本
 60 特急に塔婆に西日楽しき影や
 61 黒潮に溺れぬ岬梅雨の空
 62 寝がえりに打ち水遠くなりけり
 63 木の国や屠りを均す露の雨
 64 手渡されし線香花火鳴りにけり
 65 夏の川木橋に添いて清らなる
 66 更衣都会は紅をさし疲れ
 67 炎天や赤子に濁る夕の水
 68 開きたる日傘の中に道続く
 69 手花火や雑魚の水輪も浅瀬縁
 70 道譲るとき刈り草を少し落とし
 71 磯風にいくたび響く七夕や
 72 手放せし流灯往かぬ押してやる
 73 流灯を追い越してゆく光かな
 74 灯籠にみな薄翅を仕舞い直し
 75 百合高く開かせ晒す山の国
- 76 草臥しの武者草の花食べるかな
 77 広げられし梅まだ固き波音かな
 78 烏賊は手の弛み残して月涼し
 79 風草を透けて古ル道ばかり候う
 80 秋耕や犬に嗅がれる蟹の殻
 81 かなかなに幾神埋めし山なりしか
 82 梅を干す口笛は吾に聴かす為
 83 波少し打ち上げ花火北に引く
 84 足曲げて眠る父母盆の潮
 85 朝顔を立ち塞う骨の入れ替わる
 86 蛸や水響かせる木々の瘤
 87 夕顔に近づき雨具澄みにけり
 88 遊びみな何処かに隠れ秋彼岸
 89 紫蘇壺の崩れてまだ梅を容れる
 90 どの林檎にも青き一縷母郷は
 91 吾が指を虫上りゆく秋の暮
 92 秋の灯の他に数えるものもなく
 93 月光に守宮の胸の浮き沈む
 94 男郎花数多踏みつけ身持ち犬
 95 まなじりに光頂き水母生れる
 96 秋静か帆船も休む風を知り
 97 命日のダリヤの畑に過ごしけり
 98 蜘蛛二匹小窓を分ける夜長かな
 99 竹の春真緑りという肉肥やし
 100 紙の上紙の流れる秋思かな